

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：14501

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(B)）

研究期間：2019～2023

課題番号：19KK0023

研究課題名（和文）ポスト・アラブの春時代における中東ムスリムのグローバル移動と社会関係の複合的再編

研究課題名（英文）Global Migration and Reconfiguration of Social Relations among Middle Eastern Muslims in the Age of the Post-Arab Spring

研究代表者

齋藤 剛（Saito, Tsuyoshi）

神戸大学・国際文化学研究所・教授

研究者番号：90508912

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,900,000円

研究成果の概要（和文）：2010年末に始まった「アラブの春」以降、中東の多数の国では社会的・政治的変動が続いている。その中で欧州に向かった中東出身の移民や難民の研究は、欧州における問題解決という観点から、政治学、国際関係論、平和構築学などをはじめとした諸学問分野において強い関心を伴って進められてきた。本研究課題は欧州以外の諸地域にも及んでいる中東からの移民や難民が、移動に伴う人間関係の形成や人的交流を通じて、どのように新たな知識や宗教・民族をめぐる理解を形成するのか、そして彼らの移動が中東をはじめとした諸地域に何をもたらしたのかを、モロッコ、エジプト、イエメン出身の移民や難民を対象として明らかにすることが目的である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

民主化を旗印に様々な要求を国家に突きつけた「アラブの春」は、その後の中東諸国の政治体制のあり方や域内秩序を根底から揺るがした。モロッコやチュニジアでは市民社会の発展が見られた一方、リビアやシリア、イエメンでは内戦が勃発し、エジプトでは独裁体制が強化された。その結果、欧州をはじめとした近隣地域だけでなく、東アジアにまでも移民、難民が、大量に流出し、世界的なネットワーク再編を余儀なくさせた。本研究の学術的・社会的意義は、そのような21世紀の世界のあり方を現在進行形で根源的に変貌させる中東世界の今日的変容を、人の移動のあり方の変容と地域、そして知の再編から捉えようとする点にある。

研究成果の概要（英文）：Since the Arab Spring erupted at the end of 2010, drastic social and political changes have continued in Middle Eastern countries. In this context, scholarly interest in the influx of migrants and refugees from the Middle East into Europe has increased. However, many discussions have fallen short of developing an adequate framework for understanding the ongoing transformation in the Middle East in relation to the development of the recent migration movement due to the conventional research's problematic colonialist perspective inherited from the long tradition of Middle Eastern studies developed in Europe and the US. This research project aims to fill this gap by clarifying how migrants and refugees from the Middle East develop new knowledge and understandings of religion, ethnicity, and global power relations with a special focus on the formation of relationships and personal exchanges that accompany their migration.

研究分野：文化人類学

キーワード：ポスト・アラブの春 中東 移動 知 ネットワーク 移民・難民 遺産

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

2010年末に始まった「アラブの春」以降、中東諸国の混迷は深まっている。シリア内戦、イエメン内戦の長期化が現地に甚大な被害をもたらしているだけでなく、エジプトやモロッコなど比較的政治的に安定した国においても、新しい人の流れが見られる。それに加えて「アラブの春」の影響は欧州に波及し、移民、難民の増加、イスラーム国の台頭とテロの拡散などが顕在化している。同時に、移民の統合や同化政策を押し進めてきた欧州諸国におけるイスラモフォビアの広がり、社会の分断や差別の増加が深刻な問題となっている。

本研究では、「アラブの春」以降の人の移動を理解する上で問われるべき重要な研究課題として、以下の諸点があるという理解を背景として研究を開始した。

第一に、中東からの移民や難民の流れは、欧州のみならず、中東域内、アフリカ、アジアなどの欧州以外の諸地域にも及んでおり、新たな地域間の結びつきを生み出している。欧米中心に地域関係を捉える視点では注目をされてこなかった新たな地域連関の実態がどのようなものであるのか、移動に伴う人間関係の形成や人的交流を通じて、新たにどのような知識や、宗教・民族をめぐる理解が形成されているのかを明らかにする必要がある。

第二に、中東から欧米への移民に着目する研究は、これまでの移民の出身地をもっぱら「移民輩出地」、「故郷」、あるいは移民の「送り出し国」とのみ捉えて来た。だが、これまでの移民研究において移民の送り出し国と捉えられて来た北アフリカのモロッコなどにおいては、サブ・サハラ以南アフリカから移民が多数流入し、社会の構成そのものが変化を見せるという事態が新たに生じている。こうした現実を踏まえ、本研究は、移民輩出地とされてきた地域が、今日、帰還移民のみならず、他地域から多様な人々が流入することによって新たな相互交渉の場となっていることに着目する必要がある、輩出地/流入地という区分を越えて、いかなる社会編成と知の形成が新たに生起しているのかを明らかにする必要があると考えた。

第三に、中東諸国は「アラブの春」以前から移民を輩出してきただけでなく、そもそも人々が離合集散を繰り返して来た場でもある。それでは、「アラブの春」後の人の移動は、それまでの人の移動と何が違うのか、「アラブの春」後の移民や難民などの形をとって顕在化した人の移動は、中東をはじめとした諸地域に何をもちたのか。このような問いの検討は、現代世界が直面する劇的な社会情勢の変化を把握するうえでも重要であると研究班では考えた。

2. 研究の目的

本研究課題の目的は、中東系ムスリム移民や難民の中でもモロッコ、エジプト、イエメン出身者を手掛かりとして、特に「アラブの春」以降の中東出身者の人の移動の特質の一端を解明することとともに、中東、欧州、アジア、アフリカなどを跨ぐ人の移動を通じて、各地の社会関係や知はどのようにして再編されているのかをミクロな次元から明らかにすることにある。すなわち本研究は、ヒト・モノ・情報が「動くこと」に注視し、その今日の特徴を明らかにしながら、現代社会を生きる中東出身者が、変わりゆく世界を生きながら、いかにして自らの生活の場を切り開いていこうとしているのかを捉えようとするものである。

3. 研究の方法

共同研究としては齋藤が統括を担当し、同時に齋藤がモロッコ、大坪がイエメン、鳥山がエジプトの出身者を対象に各々に海外の研究協力者と共に個別研究を実施した。移民輩出に至る「アラブの春」以前の植民地支配をはじめとした歴史的経緯や、独立以降の政治的・経済的状況に目配りをしてつつ各地域の研究を進めることで、「アラブの春」以降の今日の様相を明らかにした。その際上掲の3つの国の出身者を研究対象とすることにより、マグリブ(西方イスラーム世界)、マシュリク(東方イスラーム世界)、ハリージュ(アラビア半島)という中東の地域多様性に目配りすること、個々の国家情勢を背景とした移民の多様な展開を広くとらえることの二点を意識した。その結果齋藤は、モロッコの国内移動に重点を置いた研究を実施した他、大坪は韓国におけるイエメン移民の動向を追い、鳥山はサウジアラビアやモルディブ(研究協力者の Abdalla が担当)におけるエジプト移住労働者の実相を観察することとなった。加えて、それらの個別研究から得た知見を、知と社会関係の再編をテーマに国内外の研究者と国際シンポジウムを3回にわたって開催し、国際的なレベルでの理論的先鋭化に努めた。

4. 研究成果

令和元年(2019)年度10月に本研究課題は始まった。12月には神戸大学で国内研究者の間で研究会を開催し、本研究課題についての共通理解を図るとともに、海外調査を含めた今後の研究計画を練り、海外研究者との研究についても準備を進めた。しかし、2020年に入って新型コロナウイルスの世界的な感染拡大を受けて当初の予定を変更された。このように、計画に変更は見られたものの、海外協力者のレオン・ブスケンス(ライデン大学)、ムスタファー・アブダッラー(ベルリン自由大学)とは、それぞれパリ(EHESS)とナント(ナント先端学術研究所)に

において、鳥山を交えた研究報告と研究討論を進め、今後の研究計画についての協議を重ねることができた。

令和2(2020)年度は、民衆文化、嗜好品、教育、ジェンダーといった切り口から、グローバル化の中での社会関係の複合的再編をめぐる検討を進めた。

当該年度の成果としては、まず、研究代表者である齋藤が編者の一人となり、分担者の大坪、鳥山、海外研究力者のブスケンスの研究成果を収めた論集 *Sur la notion de culture populaire au Moyen Orient* の刊行を挙げることができる(2021年3月)。これに加え、大坪は「嗜好品からドラッグへ：イギリス・オランダのイエメン人とカート」と題した論考を『嗜好品文化研究』(第5号)誌上で発表しており、鳥山は『立教大学ジェンダーフォーラム年報』(21号)誌上に「現代エジプトにおける高齢者介護 家族のダイナミクスに注目して」と題した論考を発表している。また、研究代表者の齋藤は共著書『生き方としてのフィールドワーク』(中尾世治・杉下かおり編、東海大学出版部、2020年)を公刊した。

さらに鳥山とブスケンスは、10th International Conference of Museums for Peace において、“Between Heritage and Peace”と題したパネル・セッションを組織し、モロッコやシリアの事例を用いて、文化遺産と紛争の関係についての問題意識を提起した。報告では、これまで遺産保全は紛争回避の文脈で注目を集めてきたが、その議論の主体が国家に占有されてきた点で、弱者抑圧という暴力性を孕む点が強調された(2020年9月、京都・オンライン開催)。2021年2月には、大坪が招聘・企画依頼を受けて立案したシンポジウム「境界を楽しむ：中東・イスラーム世界の嗜好品」が開催され、大坪と鳥山がそれぞれ成果発表を行なった(大阪：国立民族学博物館現代中東地域研究拠点、オンライン開催)。これらに加えて、大坪は人工知能学会において小田淳一氏(東京外国語大学)と共に成果発表し(2021年3月)、2020年度研究会優秀賞を受賞した。また、鳥山はカナダのBalsillie School of International Affairs におけるセミナーGlobal Insights において成果発表を2020年9月に行ない、アメリカ合衆国の政治学者から高い評価を受けた。齋藤は、研究成果公開促進費を受けて出版された『ジェンダー暴力の文化人類学』(共著、2021年3月)において研究成果を発表した。以上のように班員それぞれが中心となって国際共同研究やシンポジウム、パネルの組織を実施し、議論の深化、成果発表を進めた。

令和3(2021)年度は、新型コロナウイルスの感染が世界的に収束していない状況のため、現地調査などを実施することはできなかったが、海外研究者との連携をとりつつ、研究を進めた。実績としては、研究分担者の鳥山が編者となり、本研究課題の海外研究者であるレオン・ブスケンス(ライデン大学)、エイモン・クレイコ(ヘント大学)などの研究成果を収めた論集『フィールド経験からの語り』(春風社)が刊行されたことが、まず挙げられる。さらに、鳥山は、単著『「私らしさ」の民族誌：現代エジプトの女性、格差、欲望』を立命館大学の出版助成金を獲得して公刊した。この単著出版の準備段階において、本科研班においても研究会を開催し、その内容について討議を進めたほか、海外研究者のブスケンスなどからも助言を得て改稿が進められており共同研究の一環として、本書の出版は位置づけられる。これらの実績に加えて、研究分担者の大坪は、本科研班が共催として昨年度開催したシンポジウムの成果などを踏まえた論文集『嗜好品から見える社会』を2021年度公刊している。齋藤は、本年度は共同研究の今後の展開を支える理論面に関わる研究を重点的に進めた。以上の他に、研究代表者の齋藤、分担者の大坪、鳥山が関わっている中東における家族の変容を対象とした論集企画の出版準備を進めた。また、科研班では国際シンポジウムの開催に向けた準備の一環として読書会を継続して実施したほか、令和4年度の国際シンポジウム開催に向けた準備をブスケンスと連絡をとりながら継続した。

令和4(2022)年度には、中東系ムスリムの移民・難民の実態をめぐって研究分担者の大坪が沖縄、韓国などにおいて現地調査を実施するとともにその調査・研究の成果発表を行った。研究分担者の鳥山は、海外分担者のブスケンス(ライデン大学・教授)が所長を務めるオランダ・モロッコ研究所(The Netherlands Institute in Morocco、モロッコ・ラバト市)において調査・研究に従事した。鳥山が特に進めたのは、モロッコにおける教育制度、都市再開発についての調査である。研究代表者の齋藤は、ベルベル人の中で広がっているアマズィグ運動においても重要な意味を持つ故郷なるものをめぐって研究を進めた。近年の人類学的研究、移民・難民研究においてはホーム・メイキングをめぐる研究が蓄積されているが、海外や国内の都市への移民の増加と新たな生活空間でのホーム・メイキングの動きがいかにして故郷なるものを変成させているのかという点に留意しつつ、その成果を発表している。また移民・難民と国民国家の関係をめぐる理論的検討を進める一環として、ガッサン・ハージが近著『オルター・ポリティクス』において提示した議論の内容を吟味した論考「もう一つの思考と政治に向けて：ガッサン・ハージの人類学を基礎づけるもの」を発表した。

以上のような成果に加えて、国際共同研究として重要なのは、海外研究協力者のブスケンスとともに、中東における人々の移動・遭遇・交流を伴う知の生成に焦点を定めた国際ワークショップTaste of Knowledge をオランダ・モロッコ研究所において夏季および冬季、合計2回開催したことである。本ワークショップでは、中東に加えケニアや南アフリカを調査地とする日本、オランダ、ドイツ、モロッコ、ケニア、南アフリカの研究者が集い、学術研究が内包する属人性、

親密性、および偶発性、さらには調査地と研究拠点間の知の移転という性質、さらにはそれを促進させる「書籍・書類」が持つ物質性に焦点を当てた議論が展開された。ケニアの詩人であるリウスターズ・マフムード・マウを参加者として招くなど、知の生産に付随する特権性を乗り越える実践も試みられた。

令和 5 (2023) 年度には、海外研究協力者であるブスケンスとの共同研究を一層進展させた。2023 年 8 月には、モロッコにおいて、オランダ・モロッコ研究所との共同開催で Taste of Knowledge #3 と題した国際シンポジウムを実施した。ライデン大学 (オランダ) やバイロイト大学 (ドイツ) に所属する研究者も参加し、国際的な研究ネットワークの深化と拡大の場となった。ブスケンスとは 2024 年 1 月の日本招聘時にも氏の講演会だけでなく、研究成果刊行 (英語論集、Brill より出版予定) に向けた打ち合わせを持った。また、海外研究協力者であるムスタファー・アブダッラーも日本に招聘し、西アフリカからのメッカ巡礼を主題に、国際移動がローカルな社会にもたらす影響を討議した他、モルディブにおけるエジプト人移住労働者の調査研究についての計画の策定を行った。さらに現地調査、文献研究を継続して実施し、特に大坪は韓国、沖縄における調査を、また鳥山はモロッコでの調査を進め、ネットワークを拡大させた。こうした研究を通じ、ポスト・アラブの春以降、とりわけポスト・パンデミック下の中東諸国における多様なネットワーク形成が遺産化という新たな社会現象と密接に関連していることが明らかになった。コロナ渦を受け、本科研は当初の計画から諸点において修正を余儀なくされたが、国際共同研究を通じたネットワーク形成、その拡大と深化、成果発表に向けた取り組み、さらには新たな研究課題の発見に至るまで、重要な成果を上げることができた。こうした研究成果は、上記以外にも IUAES、East Asian Anthropological Association Annual Meeting を始め、国際学会や国際シンポジウム、ワークショップでなされたほか、移動を主題とした理論的検討と民族誌的研究として刊行された。

本研究は、2019 年 10 月から 2023 年 3 月まで 4 年半の研究期間のうち、2020 年初頭からその大変を新型コロナウイルスの感染拡大により大幅な研究計画の変更を余儀なくされた。

だが、国際的な共同研究の展開を目的とする「国際関係強化促進」という本科研の趣旨から言っても、本研究は、海外研究者のレオン・ブスケンスを中心として非常に緊密な研究協力関係を構築し、共同研究を展開し、ブスケンスを中心として他の海外の研究者との連携・ネットワーク構築にも努めてきたこと、今後、本研究の成果を踏まえてさらに新たな共同研究を展開可能な状態にあることが特筆に値する。

また、主だったテーマとしては、民衆文化、嗜好品、難民、遺産形成、知の再編、故郷 (ホーム) の再創造などについて移動との関連から成果を出している。本科研の成果はこれまでの年度ごとの成果内容にも記したように多岐に渡っているが、以下に主だったものについて記す。

(1) 移民・難民化と社会関係の再編

本研究は、移動による社会関係、知の再編を検討対象としていたが、例えば、「アラブの春」以降、2015 年に勃発したイエメン内戦の長期化と人道的危機が生まれてきた状況の中で国外に大量流出したイエメン人を対象とした研究が大坪が進めている。東アフリカ、欧州、そしてマレーシアがイエメン人の主要な移動先であるが、大坪の調査・研究から明らかになったのは、歴史的にイエメンと関係があるマレーシアが一つの中継地となって東アジアにイエメン人の移動が広がっていることである。また韓国における現地調査を通じて済州島経由で韓国内に移動が展開している実態、労働の状況、就労を斡旋するブローカーや難民支援団体との関係、イエメンとの関係の紐帯をめぐる状況、イエメンにおいて日常的に用いられている嗜好品カートをめぐる韓国でのステレオタイプ化されたイメージをはじめ、難民であるはずのイエメン人が、実際のところ外国人労働者として他の外国人とともに韓国社会の最底辺に組み込まれた実態の一端が多角的に明らかにされた。

(2) 民衆文化

「アラブの春」において「民主化」を希求する運動が「民衆」の間から自生的に広がり、国境を超えてその動きが中東諸国に波及的に拡散したことに大きな注目が集まった。新たな社会の実現を希求する「民衆」と政治が交錯する場として「民衆文化」がある。この中東における「民衆文化」について、「アラブの春」以前にも視野を広げつつ、「民衆」および「民衆文化」なるものを批判的に検討した研究の成果が、齋藤が編集に加わった論集 *Sur la notion de culture populaire au Moyen Orient* である。

(3) 遺産形成

文化遺産という概念には多くの場合、国境を越えた世界市民の財産の保全という前提が含まれている。その前提には、あらゆる人々に開かれた文化財という平等主義的思想がある。しかし、紛争によって人口流出と共に文化遺産の破壊や盗難が進み、その隣国で国家主導による文化遺

産創出が活発に行われている現代中東地域において、そうした建前を額面通りに受け取るとは難しい。パネルでは、平和構築における博物館の意義をテーマに、シリアにおける人道的罪としての遺産破壊、モロッコにおける文化としてのベルベル語の復興、日本において、モノを通じて中東地域の紛争がもたらした悲劇を学ぶことの限界について議論し、遺産構築をプロセスと捉え、それが人々に何をもたらしているのかを議論することの重要性を提唱した。

(4) 知の再編

研究期間中、国際ワークショップ “Taste of Knowledge” を3回開催した。本ワークショップでは、旧植民地を対象とした研究におけるデータ収集とその分析における恣意性、偶発性、偏向性について、研究に関わる様々なアクターに目を向けつつ、知の生産に関わる諸課題を検討した。研究という知の生産は、今日的でグローバルな営みであると同時に、多様な欲求を抱える生身の人間が行う極めて私的で瞬間的なものでもある。こうした視座に立ち、本ワークショップシリーズでは、従来の知の生産をめぐる地理的権力性の批判と、それを越えた協働活動としての知の生産枠組みの創出に努めた。この成果は、齋藤、鳥山、ブスケンスが編集、大坪を含めた11名が執筆者として参加する形で Brill 社から論集として出版されることが決定している。

(5) フィールド経験の再検討

フィールドワークは通常、現場に赴き、その場所で行われていることを観察する営為とみなされてきた。『フィールドワーク経験からの語り』では、こうした認識において顧みられない、フィールドワーカーの振る舞いや人との関わり方の変化を観察に含め、相互行為としてフィールドワークを捉え直すことを試みた。その背景には、調査のツールとしてハウツーが語られもするフィールドワークに、人の営為としての調査研究という側面を呼び戻すことの必要性があった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 大坪 玲子	4. 巻 180
2. 論文標題 嗜好品研究からみえるもの 特集嗜好品：つくる・映える・やみつきになる	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 季刊民族学	6. 最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Toriyama, Junko	4. 巻 4
2. 論文標題 BOOK REVIEW: Exploring Queer Studies 1: Identity, Community, and Space KIKUCHI Natsuno, HORIE Yuri, IINO Yuriko (eds.), Kyoto: Koyo Shobo, 2019	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of the Asia-Japan Research Institute of Ritsumeikan University	6. 最初と最後の頁 206-208
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 齋藤 剛	4. 巻 -
2. 論文標題 もう一つの思考と政治に向けて：ガッサン・ハージの人類学を基礎づけるもの	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 オルター・ポリティクス：批判的人類学とラディカルな想像力	6. 最初と最後の頁 365-394
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大坪玲子、小田淳一	4. 巻 SIG-LSE-C101
2. 論文標題 カート・オントロジー構築の試み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人工知能学会第2種研究会ことば工学研究会資料集	6. 最初と最後の頁 5-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 OTSUBO, Reiko	4. 巻 152
2. 論文標題 Popular Culture or Drug: Controversial Qat in Yemen	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Sur la notion de culture populaire au Moyen-Orient (Senri Ethnological Reports)	6. 最初と最後の頁 171-190
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 TORIYAMA, Junko	4. 巻 152
2. 論文標題 The Secret behind "El sit Ghalia" 's and Mahragan 's Popularity: Growing Diversity and Dynamics within Egyptian Popular Culture	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Sur la notion de culture populaire au Moyen-Orient (Senri Ethnological Reports)	6. 最初と最後の頁 141-156
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 SAITO, Tsuyoshi, Francois Pouillon	4. 巻 152
2. 論文標題 Presentation	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Sur la notion de culture populaire au Moyen-Orient (Senri Ethnological Reports)	6. 最初と最後の頁 i-iii
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 SAITO, Tsuyoshi	4. 巻 152
2. 論文標題 Introduction	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Sur la notion de culture populaire au Moyen-Orient (Senri Ethnological Reports)	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大坪玲子	4. 巻 5
2. 論文標題 嗜好品からドラッグへ：イギリス・オランダのイエメン人とカート	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 嗜好品文化研究	6. 最初と最後の頁 84-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鳥山純子	4. 巻 21
2. 論文標題 現代エジプトにおける高齢者介護 家族のダイナミクスに注目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立教大学ジェンダーフォーラム年報	6. 最初と最後の頁 115-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤 剛	4. 巻 13
2. 論文標題 書評：藤井千晶『東アフリカにおける民衆のイスラームは何を語るか：タリーカとスンナの医学』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 イスラーム世界研究	6. 最初と最後の頁 398-408
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/250340	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計24件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 大坪玲子
2. 発表標題 韓国で働くイエメン人
3. 学会等名 韓国・朝鮮文化研究会 第83回研究例会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Otsubo, Reiko
2. 発表標題 From the Edge of the Indian Ocean: Qat as a Symbol of Inclusion and Exclusion
3. 学会等名 The 1st International Symposium of the Indian Ocean World Studies
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大坪玲子
2. 発表標題 第17回Book Launch 『嗜好品から見える社会』
3. 学会等名 立命館大学中東・イスラーム研究センター
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大坪玲子
2. 発表標題 合評会 『嗜好品から見える社会』
3. 学会等名 現代文化人類学会第3回定例研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Saito, Tsuyoshi
2. 発表標題 (Re)shaping Homeland: The Madrasa Revival Movement and the Amazigh Movement in Southern Morocco at the turn of the 21st century.
3. 学会等名 International Conference for the Global Welfare Project: The Contemporary Dynamics of Diverse Perspectives on Life and Death
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Saito, Tsuyoshi
2. 発表標題 Place of encounter, place of affection: Seeking knowledge with friends in a bookshop
3. 学会等名 The International Workshop: The Taste of Knowledge, Sequel
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 齋藤 剛
2. 発表標題 人びとの暮らしとともにある歩み：大塚和夫先生のフィールドワークと未完の民族誌
3. 学会等名 シンポジウム「近代・イスラームの人類学」、その先へ 大塚和夫先生の目指したもの
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Saito, Tsuyoshi
2. 発表標題 "Direction" of the Taste: Accidental Encounter, Affection, and Propelling Force of Life
3. 学会等名 International Workshop The Taste of Knowledge: Friendship and Fieldwork with Mostapha Naji (1951-2000)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鳥山純子
2. 発表標題 私らしさの民族誌紹介
3. 学会等名 イスラーム・ジェンダー学科研集ごもり研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鳥山純子
2. 発表標題 「私らしさ」の民族誌 現代エジプトの格差、欲望、女性
3. 学会等名 Book Launch Seminar. CMEIS/ AIJ 立命館大学
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鳥山純子
2. 発表標題 Making Analysis
3. 学会等名 The Netherlands Institute in Morocco (NIMAR) Ethnographic Research Seminar
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鳥山純子
2. 発表標題 People Again: Towards a benevolent discussion of knowledge-making
3. 学会等名 International Workshop The Taste of Knowledge: Friendship and Fieldwork with Mostapha Naji (1951-2000)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鳥山純子
2. 発表標題 エジプトで学ばされた生き延びるための処方法：ジェンダー、社会階級、グローバルネットワークに着目した社会考察
3. 学会等名 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・中東 イスラーム教育セミナー
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鳥山純子
2. 発表標題 知のメイキング現場としてのフィールド - フィールド経験からの語り
3. 学会等名 <イスラーム・ジェンダー科研2022年度全体集会> イスラーム・ジェンダー学が目指すもの 公正の問題を考える
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鳥山純子
2. 発表標題 Observing Gender in Films: Sofia
3. 学会等名 The Netherlands Institute in Morocco (NIMAR) Seminar: Case Studies on Moroccan Culture and Society No.9.
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鳥山純子
2. 発表標題 How can we discuss the taste of knowledge?
3. 学会等名 The International Workshop: The Taste of Knowledge, Sequel
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 TORIYAMA, Junko
2. 発表標題 The challenge between Heritage and Peace
3. 学会等名 the panel "Between Heritage and Peace: Heritage preservation in the time of "After Orientalism," 10th International Conference of Museums for Peace (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 TORIYAMA, Junko
2. 発表標題 Racism, Anti-oppression and International Affairs
3. 学会等名 Global Insights Balsillie School of International Affairs (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 TORIYAMA, Junko
2. 発表標題 De-politicizing Islam, Re-politicizing Islam: An Inter-Asian Attempt
3. 学会等名 Asia, Japan, and the Global Society: Developing Research through Cross-Border Academic Collaboration (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大坪玲子
2. 発表標題 品質か信頼か：イエメンのカート商人の選択
3. 学会等名 シンポジウム 境界を楽しむ：中東・イスラーム世界の嗜好品（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鳥山純子
2. 発表標題 ほろびゆく嗜好品？ エジプト都市部の「粗野で下品」でクールなリップ
3. 学会等名 シンポジウム 境界を楽しむ：中東・イスラーム世界の嗜好品（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鳥山純子
2. 発表標題 フィールドにおける性、このやっかいなる好機
3. 学会等名 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所2019年度第1回フィールドサイエンス・コロキウム「フィールドで出会う性、性から出会うフィールド：イスラームとジェンダーの関りから」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 TORIYAMA, Junko
2. 発表標題 Searching for performative analysis of interactions/ social positions in the Middle East: The newest challenge of writing ethnography on the Middle East in Japan
3. 学会等名 Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales (EHESS、フランス)(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 TORIYAMA, Junko
2. 発表標題 Encountering with the Middle East for Japanese ethnographers: A thought around 'politeness'
3. 学会等名 Journee d'etude organizee dans le cadre du seminaire sciences sociales du Japon (University of Paris, UDP / INALCO / Japan Foundation) (開催場所: College de France) (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計13件

1. 著者名 竹村和朗、大川真由子、鳥山純子、大坪玲子、西川慧、齋藤剛、岡戸真幸、今堀恵美、岩崎葉子、伊藤弘子、森田豊子、村上薫、鈴木恵美、岩崎えり奈、錦田愛子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 272
3. 書名 うつりゆく家族	

1. 著者名 八木久美子(編)、齋藤剛、鳥山純子ほか	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 748
3. 書名 イスラーム文化事典	

1. 著者名 鳥山純子(編著)、藤屋リカ、ダリラ・ゴドバン、伊藤聰、南部真喜子、保井啓志、エイモン・クレイル、賀川恵理香、小栗宏太、小川杏子、村上薫、細谷幸子、岡戸真幸、植村清加、レオン・ブスケンス、竹村和朗	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 288
3. 書名 『フィールド経験からの語り』	

1. 著者名 足立研幾・板木雅彦・白戸圭一・鳥山純子・南野恭義(編著)、中本真生子・西村智朗・川村仁子・嶋田晴行・中川涼司・大山真司・末近浩太・林大祐・南川文里・本名純・中戸祐夫・星野郁	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 297
3. 書名 『プライマリー国際関係学』	

1. 著者名 鳥山純子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 432
3. 書名 『私らしさの民族誌 現代エジプトの格差、欲望、女性』	

1. 著者名 大坪玲子・谷憲一（編著）、渡辺浩平・田中理恵子・古川勇気・鳥山純子・寺尾萌・工藤さくら・今城尚彦・小牧幸代・松前もゆる・西川慧・河野正治・大島崇彰・辻大和	4. 発行年 2022年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 424
3. 書名 『嗜好品から見える社会』	

1. 著者名 齋藤剛、田中雅一（編著者）、嶺崎寛子（編著者）、藤倉康子、赤堀雅幸、岩谷彩子、和崎聖日、澤野美智子、石田知恵、内藤順子、山崎浩平、村上薫、東聖子、佐々木祐、辻上奈美江、小牧幸代、田川夢乃	4. 発行年 2021年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 476
3. 書名 『ジェンダー暴力の文化人類学：家族・国家・ディアスポラ社会』	

1. 著者名 鳥山純子、大坪玲子、服部美奈（編著者）、小林寧子（編著者）、長谷部圭彦、秋葉淳、山崎和美、マルコ・ソッティエレ、池田美佐子、久志本裕子、内田直義、イディリス・ダニシマズ、見原礼子、中島悠介、日下部達哉、鴨川明子、中田有紀、河野明日香、松本ますみ、原智佐	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 261
3. 書名 イスラーム・ジェンダー・スタディーズ3 教育とエンパワーメント	

1. 著者名 鳥山純子、高尾賢一郎（編著者）、後藤絵美（編著者）、小柳敦史（編著者）、帯谷知可、奈良雅史、丸山空大、山本繭子、シュルーター智子、森田豊子、上原潔、岡本亮輔、問芝志保、麻生美希、竹村和朗、和崎聖日、海野典子、碧海寿広、谷 憲一、中西尋子、西川 慧、高岡豊、辻上奈美江、石黒安里、青木良華、飯田陽子、朝香知己	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 370
3. 書名 宗教と風紀： 聖なる規範 から読み解く現代	

1. 著者名 大坪玲子、鳥山純子、齋藤剛、近藤二郎（編集代表）、鈴木董（編集代表）、赤堀雅幸（編集代表）、他多数	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 826
3. 書名 中東・オリエント文化事典	

1. 著者名 OTSUBO, Reiko、近藤洋平（編著者）、TSUJIGAMI, Namie、高尾賢一郎、中村覚、GOTO, Manami、齋藤純、大川真由子、馬場多聞、松本弘、千葉悠志、保坂修司	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学中東地域研究センタースルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座	5. 総ページ数 259
3. 書名 アラビア半島の歴史・文化・社会	

1. 著者名 中尾世治（編）、杉下かおり（編）、吉田早悠里、川崎一平、菅沼文乃、杉尾浩規、齋藤剛、吉田竹也、菊地茂夫、山崎剛	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東海大学出版部	5. 総ページ数 333
3. 書名 生き方としてのフィールドワーク：かくも面倒で面白い文化人類学の世界	

1. 著者名 Dominique Casajus (ed.), Tetsuo, Nishio (ed.), Francois Pouillon (ed.), Tsuyoshi Saito (ed.)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 National Museum of Ethnology	5. 総ページ数 203
3. 書名 Sur la notion de culture populaire au Moyen-Orient: Approches franco-japonaises croisees	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鳥山 純子 (Toriyama Junko) (10773864)	立命館大学・国際関係学部・准教授 (34315)	
研究分担者	大坪 玲子 (Otsubo Reiko) (20509286)	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員 (12603)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
オランダ	ライデン大学	ルーヴァン・カトリック大学		
モロッコ	ムハンマド5世大学	オランダ・モロッコ研究所		
韓国	ソウル大学			
ベルギー	ヘント大学			
フランス	社会科学高等研究院 (EHESS)	国立科学研究センター (CNRS)	ナント大学	他1機関
ドイツ	ベルリン自由大学			